

国の新しい子育て支援策で、学童保育はどう変わるのか ～ よりよい学童保育をつくるために、いま取り組む課題は何か ～

真田 祐（全国学童保育連絡協議会 事務局次長）

共働き・一人親家庭にとってはなくてはならない学童保育。

いま、国の制度が大きく変わります。よりよい学童保育をつくっていきましょう！

1 学童保育（放課後児童クラブ）はどんな施設なのか

(1) 子どもにとって学童保育はどんなところか

・学童保育の目的・役割

学童保育は、「共働き・一人親の小学生の放課後（土曜日・春・夏・冬休み等の学校休業中は一日）の生活を継続的に保障すること」「そのことを通して親の働く権利と家族の生活を守る」という役割をもっています。

児童福祉法

第6条の3第2項 この法律で、放課後児童健全育成事業とは、小学校に就学しているおおよそ10歳未満の児童であつて、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、政令で定める基準に従い、授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る事業をいう。

・働く親を持つ小学生の放課後・長期休業日の「毎日の生活を保障」する施設
年間290日以上開設し、小学校よりも460時間長く（1681時間）生活している

○小学校低学年児童が学校にいる時間	年間198日	1221時間
○低学年児童が学童保育で過ごす時間	平日（198日）	726時間
	土曜日（49日）	477時間（9割の施設が開設）
※学童保育の開設時間は2012年調査 （全国学童保育連絡協議会調査）	長期休業日（47日）	478時間
	合計	1681時間

→ 「ただいま！」「おかえり！」で始まる学童保育の生活

→ 安全で安心感のある生活（子ども同士、子どもと指導員の信頼関係がカギ）

・子どもたち一人ひとりを大切にしなければ成り立たない施設

→ 子どもたちは毎日、自然に学童保育に帰ってくるわけではない

「親の願い」と「子どもの気持ち・願い」を一致させる必要がある

・「昼間のきょうだい」ともいえる濃密な人間関係が「安心感のある生活」をつくる

・「安心して生活できる」「一人ひとりを大事にする」ことが、子どもの成長・発達の原動力

→ 学童保育は大切な子どもが育つ施設。子どもの成長・発達の土台をつくっている

（事例紹介）「攻撃性にのせたメッセージ」（埼玉・亀卦川茂）

- (2) 学童保育は、「親と指導員がいっしょに子育てする施設」「子育てを支える施設」
- ・学童保育の発展、学童保育への期待は、保護者が子育ての拠り所としてきたなかで広がった
 - 「家庭に代わる生活の場」をつくるには保護者と指導員の伝え合いがカギ
 - 「おたより」「連絡帳」「お迎え時の会話」「父母会・保護者会」「夜の電話」等
 - 困難を抱えた家庭・子どもは少なくない（どの子も安心して生活できる施設に）
 - 働きながら子育てしている保護者を支える
 - 保護者と指導員の信頼関係が子どもを育て、安心感のある生活をつくる

(事例紹介)「お母さんはわが子のことで苦しんでいた」(埼玉・河野伸枝)

2 学童保育は親の切実な願いと取り組みで発展してきた

- (1) 学童保育の歴史を振り返る（略史参照）
- ・学童保育は親たちの切実な願いで誕生した
 - ・「どんな学童保育を子どもたちに保障するのか」を絶えず問い続けてきた
 - ・親と指導員がいっしょに子育てしながら、国や自治体に条件整備を求めてきた
 - ・地域の理解と支えによって発展してきた
- 「放課後児童クラブガイドライン」（2007年厚生労働省）では、保護者会等への支援・連携、地域との連携のうたわれている

7 保護者への支援・連携

保護者会等の活動についても積極的に支援、連携し、放課後児童クラブの運営を保護者と連携して進めるとともに、保護者自身が互いに協力して子育ての責任を果たせるような支援を行うこと。

3 発展途上にある学童保育、いま大きな変化の時期を迎えている

- (1) 子どもが安全で安心して生活できる学童保育への期待・要望は高まるばかり（現状）
- 学童保育数と入所児童数は増えているが、まだまだ足りない
 - 「潜在的な待機児童」は50万人と推測される
 - 地域に学童保育があっても、多くはとても条件整備が遅れている
 - 「生活の場にふさわしくない施設」「指導員の働く環境は劣悪」など
 - 課題が山積している原因には国の学童保育制度の不十分さが大きい
 - ・公的責任があいまい …… 市町村には「利用の促進の努力義務」のみ
 - ・最低基準がない …… 2007年にガイドラインがつけられたが拘束力はない
 - ・財政措置が不十分 …… 国庫負担金ではなく、奨励的な予算補助

- (2) 国は近年、学童保育の量的・質的な拡充をすすめてきた（入所児童数の急増のなかで）
- 2005年に初めて国会で集中審議（衆議院青少年問題特別委員会）
 - 2007年から「放課後子どもプラン」で「すべての小学校区に学童保育を整備」
 - 学童保育の量的拡大、大規模施設の分割、障害児受入促進、施設整備費の創設を含む国の補助金の増額、「生活の場」としての質の向上をめざした「放課後児童クラブガイドライン」（2007年）の策定。「ガイドライン」で、初めて指導員の仕事・役割を示した。
 - 「新待機児童ゼロ作戦」（2008年）で「10年間で学童保育の利用児童を3倍に増やす」
 - 「子ども・子育てビジョン」（2010年）で、学童保育の入所児童数を5年間で46万人増やす（2017年に127万人）、「ガイドライン」を踏まえて「質的な向上」をめざす。

4 国の新しい子育て支援策で学童保育はどう変わるか

「子ども・子育て支援法」と「児童福祉法改定」で大きく変わる

- 2008年から2009年に社会保障審議会少子化対策特別部会で初めて制度の見直しが検討
- 2010年から2012年に「子ども・子育て新システム検討会議」で制度見直しを検討
- 「子ども・子育て関連3法」が、2012年8月10日に国会で可決・成立（三党合意）
- 政府は、2015年（平成27年）4月1日からの施行をめざして、そのための準備をすすめている → 政権交代でも、この方針はかわらない。

（参考） 自民党の学童保育に対する選挙政策 （2012年12月総選挙政策）

58 女性の就業環境の整備 （抜粋）

大都市部を中心に保育所の拡充を図るとともに、放課後児童クラブのより一層の量的・質的向上だけでなく、待機児童が多い地域における自治体の取り組みについても支援します。

134 妊娠から子育てまで切れ目のない家族支援 （抜粋）

放課後児童クラブについて、既設の小学校施設の活用などによりすべての小学校区での設置と全学年での利用促進、その規模の適正化や指導員の増員・処遇改善などによる質の確保、「公的責任」や「最低基準」などの法的根拠の明確化などにより、公的支援の充実を図ります。

◆2013年2月28日 安倍首相 施政方針演説から

5 暮らしの不安に一つひとつ対応する政治

（子育て・介護を支える社会）

子育てに頑張るお父さんやお母さんが、育児を取るか仕事を取るかという二者択一を迫られている現実があります。

待機児童の解消に向けて保育所の受入児童数を拡大します。多様な保育ニーズに応えるためには、休日・夜間保育なども拡充していかねばなりません。放課後児童クラブを増設し、地域による子育て支援も力を入れてまいります。

● 新しくできた「子ども・子育て支援法」で学童保育はどうか

<学童保育に関係するところのポイント>

- ① 学童保育を、市町村が行う「地域子ども・子育て支援事業」(市町村事業)として位置づけます。
- ② 「地域子ども・子育て支援事業計画」の策定を市町村に義務づけます。
学童保育の整備目標などを事業計画として策定します。
- ③ 学童保育への補助金は、市町村の「地域子ども・子育て支援事業計画」に基づき支出される交付金として出されます。
- ④ 交付金は、国から市町村への直接補助となり、都道府県は予算の範囲内で補助します。
奈良市は中核市なので、これまでの負担は半分に下がります。
- ⑤ 国に「子ども・子育て会議」を設置します。都道府県と市町村にも同じような「地方版子ども・子育て会議」を設置します。
- ⑥ 法律の附則に「指導員の処遇の改善、人材確保の方策を検討」が盛り込まれた。
「質の高い教育・保育その他の子ども・子育て支援の提供を推進するため、幼稚園教諭、保育士及び放課後児童健全育成事業に従事する者等の処遇の改善に資するための施策の在り方」「人材確保のための方策について検討を加え」「所要の措置を講ずる」

● 児童福祉法の改定で学童保育はどうか？

<学童保育に関わる法改定のポイント>

- ① 対象児童を6年生までの「小学生」に引き上げます。
- ② 民間が学童保育を実施する場合には市町村の届け出を必要となります。
- ③ 国としての学童保育の基準を省令で定め、市町村は国の定める基準に従い、条例で基準を定めます。「指導員の資格」と「配置基準」は国が決めた基準に従います(最低基準とします)。それ以外の基準(開設日・開設時間・施設の基準など)は、国の基準を参酌(参考にする)して基準をつくります。ただし、次の条文に制限されます。

*児童福祉法第34条の8の2 市町村は、放課後児童健全育成事業の設備及び運営について、条例で基準を定めなければならない。この場合において、その基準は、児童の身体的、精神的及び社会的な発達のために必要な水準を確保するものでなければならない。

- ④ 市町村長は、条例で決めた基準の維持のために実施者に報告を求め検査などを行います。
- ⑤ 市町村は、余裕教室等の公有財産の貸し付け等を積極的に行い、実施の促進を図ります。

● 施行までのスケジュール

2015年4月から実施予定

- ・「地方版子ども・子育て会議」は2013年度に入ってすぐに条例で設置
国の「子ども・子育て会議」は2013年4月発足。
「地方版子ども・子育て会議」は、6月議会で補正予算と設置条例を制定して立ち上げ
- ・2013年度は国が「事業計画」や「学童保育の基準」などを決めていく
- ・市町村・都道府県は、2014年度に「事業計画」「学童保育の基準」などを決めていく

5 保護者と指導員、地域、行政が心を合わせてよりよい学童保育をつくりましょう

- 「子どもたちのためにどんな学童保育をつくっていくのか」「子育てを支える施設として、
 どのような学童保育のあり方を求めるのか」を絶えず確かめながらつくっていくこと

- 学童保育に欠かせない条件とは何か
 - ◆ 毎日の生活の場にふさわしい専用施設
 - ◆ 子どもの生命と生活を守る専任指導員
 - ◆ 毎日生活する固定された子どもたち
 - ◆ 指導員と子どもの信頼関係
 - ◆ 指導員と保護者の信頼関係
 - ◆ 信頼関係をつくりだす指導員の仕事の質（どの子にも安全で安心な毎日の生活を）
 ↑ その質を確保し、仕事に責任をもてる指導員の働く環境の整備

- 国や自治体は、学童保育の条件整備に責任を持つのが仕事（公的責任で整備を）

保護者と指導員との信頼関係を築き、地域の支えを力にして、行政の責任による条件整備を図りながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

おわりに — 日本の未来をきりひらく学童保育

- 子どもたち一人ひとりが大切にされる場所（社会）には未来がある
 「安心感がある生活」「一人ひとりが大切にされる」がキーワード

- 子育てする親たちを支えるところに未来がある
 さまざまな困難のなかで必死に生きて、働き、子育てする親たちを支える

- 親と指導員の信頼関係が作り出す「人への信頼」「人間への信頼」が未来をつくる
 「親と指導員と一緒に子育てする施設としての学童保育」

- 地域の中にある子育ての施設として、地域とともに地域をつくる施設に未来がある
 「地域に支えられ、地域の宝としての子ども、学童保育」

「攻撃性」にのせたメッセージ



亀卦川 茂 (富士見市立児童クラブ)

子どもが「かわいい」と思えない

学童保育には「親が働いている子どもが、毎日、安全に安心して学童保育で生活できること」と「学童保育での子どもの生活を通して、親が安心して働くことができること」を保障する役割があります。どんな姿をみせる子どもであっても、学童保育ではっと安心して、毎日通い続けられる生活を保障していかなくてはなりません。指導員として、この役割を果たすために、日々の実践のなかで「子どもたちと働きながら子育てをする親たちを受けとめ励ます」「ま

ずは、子どもたちのあるがままを受けとめよう」ということを大切にしてきました。

しかし、子どもたちの日々みせる姿に「受けとめよう」という意思が揺らいでしまうのです。

一年生の女の子を迎える場面です。

指「おかえり」

子「うっせえんだよ。ジジイ(ランドセルを放り投げる)」

指「なんでジジイなんだか。ほら。ロッカーにちゃんとランドセルしまっちょいなよ」

子「あんたがしまっちょいて」

指「いい加減にしな。自分でちゃんとしまいな(腕を挿んでランドセルの前に連れていく)」

子(涙目で睨み付ける)

指「なんだよ。その態度はおかしいだろ。何か気に障ること言ってる？おかえりとランドセルしまっつてだよ。なんで返事が『ジジイ』と『あんたがしまっつて』なの？」

子(涙目で)はい。謝ればいいんですよ。ごめんない」

指「ごめんなさいとかそういうことじゃないよ」

周りの子「ああ。悪いんだ。おとなのくせに子どものこと泣かせてる」

こんなやりとりで、学童保育での生活が始まったりすることもあるのです。

指導員と話をしながら宿題をする四年生の女の子のそばに三年生の男の子が近づいてきた場面です。

女子「なあに。なんでここに来るわけ。あっち行ってくれない。そばにいられるとうざいんだけど」

男子「別にいいじゃん。(指導員に)用事があるんだから」

女子「じゃあ早く用事済ませてあっち行ってよ」

男子「別にいいじゃん。ここにいたつて」

女子「嫌だ。こいつほんとうざい。(座りながら蹴る)」

男子「痛いよ。やめてよ」

指「ほら。何もしてないんだから蹴ったりしちやだめ

だよ。かわいそうだよ」

女子「なんでよ。なんで(指導員は)〇〇の肩はっかかりもつ。いつつもそうじゃん。やめてよとか言つてわざと甘えてんだよ。演技なんだよ。学校でもいきなり叩いてくるし。超うざい」

三年生の男の子は、日ごろからまわりのおとなや子どもにたいして、さまざまに「ちよっかい」を出してくるので、指導員も気にかけている子です。四年生の女の子も、ことばにはしないものの、人間関係での悩みを抱えていました。そんな一人がそばに寄るだけで「トラブル」となってしまうのです。

「ジジイ。しまっつて」と言つた一年生の子にも、反応を試みたいようにあえて近づいて来る三年生の子にも、「悪さ」をするのに指導員に「気にかけてもらえる」三年生が許せなくなる四年生の子にも、抱えているものがあつて、他者に「攻撃的」になっているはずなのです。

そうは思つていても、些細なことで、人と人が対立する場面がいたるところで起きるなかで「あるがままを受けとめる」意思が「なんでこうなのだろう」というため息に変わつてしまうのです。子どもが「かわいい」なんてとても思えなくなってしまうのです。

「クソ。死ねよ」は鎧のよう

三年生の健太という子がいます。健太は二年生の途中から学童保育に入室した子でした。面談に来たお母さんに健太くんについて尋ねると「これまでは祖母に見てもらったのですが、体調をこわして健太のことを見切れなくなってしまったのです。言うことを聞かない子なのでどしどし怒ってやっつけてください。きつく怒ると外へ飛び出して行くことがあります。そのうち戻ってくるので、ほっておいてください」と話してくれました。健太くんは、入室するとあそんでいる子のあそびの邪魔をする、人をからかっけ逃げるということを繰り返しました。ある日、一年生へのからかいが、何度も止めるように声をかけても続くので、怒りが爆発してしまいました。

指 「両肩を掴んで どうして、そんなことをするんだ。嫌がって泣いているだろう。ほら。この子の顔を見てこらん」

健太 「放せよ。放せ。このクソ。死ねよ」

同じことばを繰り返して、上目づかいで睨み続けていました。

指 「わかった。手は放すよ。クソ、死ねじゃわからないだろう。なんでこんなことをするのかちゃんとことばで話してくれよ」

健太 (無言で睨み付ける)

しばらく睨み合っていました。この状況では、ことばを引き出すことは難しいと思いました。

指 「なんで僕が怒っているか、それはわかるかい」

健太 (うなずく)

指 「そうか。それはわかっているんだね。じゃあ、睨めっこはもう止めよう。怒りすぎて悪かったな。怖かったらう。ごめん」

根負けして白旗を揚げるような気分でしたが、このことばの後に、健太は「ふう」と息を吐き、もとの温和な表情に戻りました。からだに入っていた力も抜けたようでした。

健太くんの「クソ。死ねよ」は、まるで自分に向けられた怒りを必死に防ぐ「鎧」のように思えたのでした。

「クソ。死ね」を受け入れる

「一緒に帰ろう」。健太くんは声をかけて、一人で自宅に向かって歩いて行きました。

指 「健太くん、土曜日も学童休みなしで来てるだろ。えらいなあ。たまには休みたいと思わないかい」

健太 「そうかなあ。あんまり思わないなあ」

指 「そうか。がんばってるんだな。健太くんってさ、どこの保育園から来たんだっけ」

健太 「おれの保育園は東京。離婚してこっちに来たんだ」

指 「ごめんね。変なこと聞いてちゃったね」

健太 「いいよ。お母さんの誕生日がもうすぐなんだ。おれプレゼント作ったよ。これあげるんだ。二つ作ったから一個(指職員に)あげるよ」

指 「お母さん、きつと喜ぶよ。ありがとう」

プレゼントは、学童保育で作っていた「アイロンヒート」でした。

健太くんと「けんか」したことと帰り道で話したことをお母さんに話しました。「やさしいところもあるんですね。楽しみにしています。健太には、イライラしてついつい口うるさく叱っちゃうんですね」

「クソ。死ね」の一方では、お母さんにむけた想いがあったのでした。

お母さんの仕事が、夜勤日もある職種に変わりました。健太くんは、あそびの合間に「お母さんにほとんどあつてない。別にいいけど。忙しいから」と話してくれました。

この話もお母さんに伝えました。「そうなんですか。それでもあなたが休みの日でも学童に行きたがるのよね」

お母さんを想い、寂しい気持ちももっていて、でもどこかで割り切ろうとしている健太くんに思えてきました。

「健太、先生に怒られてばかりだよ。同じクラスの子どもたちが教えてくれました。そんな時に、健太くんとこん

なやりとりがありました。

健太 「おんぶしてよ。しないと殺すよ」

指 「そんな言い方されてする人はいないよ」

健太 「やれよ。このクソッ」

指 「そのことば使いはどうにかならないのかなあ」

指 (おんぶする)

健太 「ありがとう。大好き」

出会った頃に言われていれば「なんだ。そのことば遣いは。人に頼むときにそんな言い方はあるか」とことばを返していたはずですが、でもこの時には「殺すよ」「クソ」ということばに過剰に反応しませんでした。健太くんのお母さんへの想いや学校での様子が、少しだけわかっけていたので、「殺すよ」ということばが、脅してでも「甘えたい」というメッセージがこもっているように思えたからでした。

このこともお母さんにお話しました。「変な子なんですよ。先生、こんな奴のことをよく面倒みてくれていますよね」。話し終わったお母さんの眼は潤んでいました。

健太くんは、その後も、さまざまな出来事を起こしています。

家庭でも厳しく怒られることもありました。お迎えに来たお祖母さんともお話しました。「母親もイライラして叱ってばかりなんです。余裕がないんです。叱られて、健太は黙ったままで、ごめんなさいを言うだけです」。理由も言い

訳も話さず、抱えている「怒り」や「辛さ」を自分のなか
にしまい込んでいるように思えました。人を傷つけ、遠ざ
ける「クソ」「死ぬ」ということばでも、出した方がよい。
「なんていうことば遣いをするんだ」という対応だけでなく、
困難かもしれないけれど、まわりの人間関係のなかで
誰かが「ことば」に替えてあげられればよいのではないかと
思ったりするのです。

健太くんが学童保育からの帰り際に「じゃあね。おれ帰
るよ。バイバイ」といつも言います。お迎えに来ていたお
祖母さんがそれを聞いて「先生にだけです。こんなふうに
挨拶するのは」と言っていました。

「かわいい」と思えない子どもたちは、まるでイガ栗かウ
ニのようです。心と全身を棘で覆っているような。でも傷
つくし、辛いけれど、その棘をかい潜ってなかに入ると、
少しずつ子どもたちが「いとおしくなる」気がします。

「攻撃的」であればあるほど、誰かに受けとめてもらいた
い、心に手を差し伸べてもらいたいと思つていているように思
えるのです。次から次に「ツワモノ」と出会うときに、自
身をなんとか奮い立たせてくれるのが、健太くんたち、悪
戦苦闘している子なのです。

人と人が繋がっていられる安心感

一ヶ所の学童保育に長く勤めていることもあって、卒業

していった子たちが、何かの時に顔を見せてくれています。

訪れてくれた子たちは、学童保育時代には、それぞれ
「悪」の限りを尽くしたといつてもいいほどの子がほとんど
なのです。「おれ(あたし)のこと覚えてる？」と言います。
忘れようにも忘れられないので「もちろん。覚えてるよ。
〇〇でしょう」と返します。どの子も決まって必ず「ああ。
よかった。覚えていてくれて」と言います。

その後自分たちがした「悪事」や「失敗」をなつかし
そうに話します。

こちらも「今だから言えるけどあの時は辛かったよ」と
言つたりします。当時は、あんなに辛い格闘の日々だった
のに、心に暖かいものが流れます。再会で日常の何が変わ
るわけではないのですが、「繋がっていられる安心感」みた
いなものを青年になった子どもたちも持ち続けているんだ
なあと思つたりします。

卒業した五年生の男の子が、総合の授業の「仕事調べ」
で学童保育に来ました。この子も在籍中に「悪さ」の限り
を尽くし、指導員を悩ませ続けて、それで卒業していきま
した。その子が、まじめな顔をして「学童保育の仕事でた
いへんなことはなんですか」と聞いてきました。返事に困
つっていると、「よかった。おれみたいなたいへんな子ども
あそぶことですよ」と言つたのです。そうか。今だから振
り返れるのかと思いました。

出来上がった「仕事調べプリント」には、学童保育で生
活した様子がすべて書いてありました。「おやつは手作り
でおいしい」「小刀で木刀が作れる」「指導員があそんでく
れる」これを見て「指導員が怒ってくれるなら」と笑い合
いました。

この子が行った数年間の「悪」って何だったのだろうと
思います。ことばにはできないような思いが渦巻いていて、
それが行為に繋がっていったのかもしれない。でも一緒
に過ごした年月のなかではわかりませんでした。「どうか先
生を困らせてやろうとしてやっているのではないことは信
じてやってください」というお母さんからのお手紙ではつ
としたことを覚えています。

「悪」を出し、それを「どうしてなんだ」と右往左往しな
がら懸命に「受けとめ」ようとしたことが何か意味をもつ
ているのかどうかは、よくわからないのです。子どもは
「悪事」を働き、指導員は悩み続けただけのような気がする
のです。

でも、過ぎた後に、一人で笑い合えたので、ほつとした
りました。「悪」をめぐる関係があつても、今も繋が
っていられることがうれしかったりするのです。

きけがわ しげる 一九六二年生まれ。富士見市立永谷放課後児
童クラブ勤務。埼玉県和光市在住

『教育』特集テーマの予告と原稿の募集

本誌では、読者の方々からの論文、実践記録(子ども・青年の姿がよくわかる)などの原稿を募集いたします。原稿が特集の趣旨にあえば掲載します。左記宛に早めにお送りください。なお、原稿は返却いたしません。

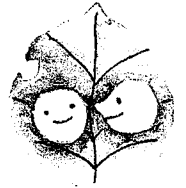
◎今後の特集テーマ		(原稿締切)
五月号	憲法と教育	二月上旬
六月号	家族と教育	三月上旬
七月号	学力テストと学力・リテラシー・教養	四月上旬
八月号	①教育の危機と教育運動の新しい展開 ②評価論	五月上旬
九月号	思春期・青年期の職業をめぐる不安と教育	六月上旬
十月号	教室のなかの気になる子	七月上旬

原稿枚数と送付先(郵送にて)

- ・原稿枚数 四〇〇字×二〇枚以下
- ・原稿送付先 〒二五二〇六 東京都新宿区築地町一九
小野ビル2F 教科研『教育』編集部
- ・問い合わせ 編集長・田中孝彦
☎〇四二四一五三二一九四五

事例①

お母さんは、わが子の
ことで苦しんでいた



※お母さんに伝えたい思いが伝わらない

遊びで負けそうになると、「オレなんかどうせ死んでしまえばいいんだ！」とバットをたたきつけ、泣き叫ぶアツシのことが気になっていました。毎日毎日、学童で起こるぶつかりやトラブルの中心にいるアツシ。お母さんにアツシの様子も伝えたいし、家でのアツシの様子も知りたいと思っっているのですが、お迎えに来るお母さんは、

「アツシ、早くしなさい！」

とこちらから声をかける隙もないくらいに大急ぎで帰って行くのです。それならばと、手紙を書いたり、あの手この手で工夫したのですが、返事をもらえないままでした。

その頃、わが子のことで悩んでいたアツシのお母さんに、私がアツシの言動を理解しきれずにいることや、お母さんに伝えきれないもどかしさを感じていることを相談しました。

アツシのお母さんがアツシのお母さんを保護者会に誘いだしてくれました。保護者会で子育ての悩みをみんなで語り合いました。アツシのお母さんが、

「私はずっと前から悩んでいたんだけど、三人の子どもの中でも下の子二人は受け入れられるんだけど、アツシだけはどうしても受け入れられないんだよね。悪いと思いつつアツシを好きになれないし、膝に抱くのも体が受けつけない。アツシは生んですぐに預けて仕事復帰して、保育室のはしごだったからかもしれない」と悩みを打ち明けました。他のお母さんも、

「実は、誰にも言えなかったんだけど、私もそうなんだよね。できることなら、長女の子育てをお腹の中からやり直したいと思ってる……」

と話しました。それぞれの子育ての悩みが語られる中で、それまで黙って話を聴いていたアツシのお母さんが、

「アツシが……」

とつぶやくと、その後は言葉にならず、顔を覆ったまま泣き出したのです。その姿を見たときに、私はハッとしました。「お母さんは心の底でアツシのことを心配していたんだ……」とはじめて、アツシのお母さんの気持ちに手が届いたのです。

※失敗の教訓

次から次にトラブルを起こすアツシなのに、伝えても伝えても反応がないお母さんのことを「アツシのことをちゃんと考えてよー」と思っていた私は、はじめて、お母さんは、考えていなかったわけじゃなくて、ホントは心配なわが子のことを相談できずに苦しんでいたのだということに気づくことができました。

それまで、私の伝える内容も「学童でこういうことがありました。家でも話し合ってください」などと、かえってお母さんを追い詰めていたんじゃないだろうか。指導員として、お母さんを支える立場になりえていなかったことを振り返りました。

私は、目の前で泣くアツシのお母さんに、

「一緒にアツシを育てようね」

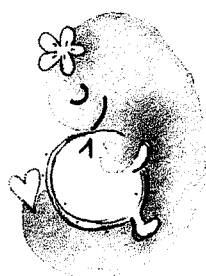
と繰り返しながら、一緒に私も泣き続けたのです。

このときに、指導員としての「何とかしてよ」の思いは、「一緒に育てよう」という思いに変わりました。そしてお母さんたちの「子どもを受け入れられない」の言葉の中には、「子どもが何を考えているのかわからない不安」「どう対応していいのかわからない戸惑い」「思うように育たない焦り」があることを感じました。

この失敗の後には、「私(指導員)が、相手の思いを理解しようと思って関わらなければ相手の思いは見えてこない」、自分にそう言い聞かせ続けてきました。そして改めて、親たちの子育ての不安や思いを聞いて聴き取ることを大切にしていこうと思えたのです。

事例②

本当はお母さんに
甘えたいのに……



※アキトママに話した出来事

祖父母、母と四人暮らしのアキトくんのお迎えは、入所して以来ほとんどババ(祖母)です。忙しいアキトくんのママとなかなか直接会って話すことができず気になっていたので、久しぶりにお迎えに来たアキトママと話しました。

「この前、私、アキトのことを怒っちゃったんだよねー」と切り出すと、

「ええー、アキト、何か悪いことやっちゃったのー？」
とママがあわてました。

「悪いことって言うよりね、私がアキトの一面に気づいたことがあったことをママに伝えたいと思ってね。この前、学童に入って間もないお姉さん指導員の新しい帽子をわざと泥水に投げ込んで汚していたから、お姉さん指導員も困って注意したにもかかわらず、また、お姉さん指導員の靴を雨の道路に投げたんだよね。アキトは、お姉さん指導員と関わるときつけにしたかったと思うんだけどね。」

『ちょっとー、アキトくん！』とお姉さん指導員に呼ばれても知らん振りでごうごうと去ろうとしたから、私が、『アキト、呼んでるよ、ちゃんと話しておいで』と声をかけたから、『うっせー、コーノに関係ないだろ！』だったから、『コーノは関係なくない！アキトには人に嫌な思いをさせたまま平気でいる人であってほしくないって思っているから黙っていられない』って言ったの。

最初、私を睨みつけていたんだけど、アキトが『わざとじゃない』と言ったから、『わざとじゃないことはわかった。でも呼び止められたときに相手の気持ちに気づいたんでしょ。知らん振りして立ち去ろうとしたから、気づいたときにどう行動するか、考えてほしいよ』とアキトに話すと、アキトは黙って立ち上がって、お姉さん指導員の靴を拾いに行くと、

みずから『ごめんなさい』って謝ったの。アキトを抱きしめて、『アキト、偉かったね、誰だって間違うことも失敗することもあるけれど、自分の過ちに気づいて行動できたアキトが偉かったね、それでいいんだよ』と頭をくしゃくしゃ撫でたら、そのときになってアキトがはじめて泣いたんだよ。

怒られてるときは、自分が否定されていることを感じて、睨みつけながら自分で自分を守ったんだね。自分が受け入れられたときにやっとな力を抜いて泣けたアキトって、まだこんなに小さいのに自分を守ること必死なんだなあって思ったらいじらしくて、私もアキトと一緒に泣いちゃってたよ。そんな無理しないで寄りかかっていいよって、アキトに伝えていきたいと思ってるんだよ！

とママに伝えました。ママも涙ぐみながら聞いた後、「実はね……」と話してきました。

*ママなんていらぬ

「私は、仕事から帰ってくるのが遅くて、アキトを寝かしつける時間しか、アキトと一緒にいらぬんだよね。この前も、一緒にベッドに入ってアキトを寝かしつけようとしたら、アキトが私に、『ママはいらぬ。僕の話はバアバ（祖母）が育ててくれるから、ママはいらぬ』って言ったんだよね。それって、なんかショックだったんだよね」

ママは深刻な顔でした。

「そうだね。言葉通りに受け取ると、親としては辛いよね。でも、さっきの話もそうだけど、アキトって、自分を必死で守って生きてるから、『ママはいらぬ』って言葉は、逆にママはずっと側にいてほしいって、甘えたんじゃあないかな。アキトが、ママはいらぬって言うても、ママはアキトから離れないってことを、アキトは確かめたかったんだね。ストレートな表現じゃなく、そんな形であっても、アキトがママに甘えたい思いを投げ出したことはよかったと思うよ」（ママは、再婚を目前にしていたこともあり、このころのアキトの言動は不安定でした。）

するとママは、

「こんなことをキャサリン（私のこと）に話すの、どうかなって思ったけど、話せてよかった」

ママはポロポロ涙を流しました。ママは、アキトに寂しい思いをさせていることの負い目に加え、実の親とはいえ、祖父母に世話になっていることへの申し訳なさも話してくれました。祖父母からは「子育てが他人まかせ」に見えているママであっても、内心、自分のふがいなさを感じながら、いまだに親の手を貸してもらわずにはいらぬ状況を心苦しく思っている切なさが伝わってきました。

「ママは、たいへんな状況でもアキトを手放さないでがんばってきたんだもの、えらいよ。今、アキトがそのことを十分理解できなくても、ママの愛情とがんばりは必ず伝わるよ。今があるから大丈夫！アキトはママのことが大好きだよ。ジイジもバアバもたまには愚痴ってくるかもしれないけど、ジイジとバアバの生きる張り合いにもなっているんだから！ジイジとバアバの愚痴は私が引き受けるから大丈夫！ママは今までのように、短くてもアキトとの時間を大事にしてね。ママのがんばりをこれからも応援していくから、何でも話してね」

「ありがとね。思い切って話せてよかった。これでいいんだね」

ぐしゃぐしゃに泣きながらも、笑顔になって帰って行くアキト母子を見送りました。

ジイジとバアバにも、ママの思いを伝えました。

「へえーそう思っているんだ……子どもがいくつになっても親は親だからしょうがないよ。一番たいへんなときに突き放すようなことはできないし……」

とジイジが笑いました。親子だからこそ、気まずく言えないこともある。指導員は、それぞれの思いを聴き届けながら、関係をつなげることが大切です。